

植物 CO₂資源化研究拠点ネットワーク (NC-CARP) 産学連携コンソーシアム
第 11 回バイオマスリファイナリー研究会 開催案内

NC-CARP 産学連携コンソーシアム会員各位

皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さてこのたび、第 11 回バイオマスリファイナリー研究会を下記のとおり開催いたしますので、万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようお願いいたします。

日 時	平成 28 年 1 月 22 日 (金) 16:00~18:00 (15:30 受付開始)
場 所	東京大学理学部 2 号館 4 階講堂 (東京都文京区本郷 7-3-1)
プログラム	<p>16:00~16:40 講演 1 「熱帯リグノセルロース資源の持続的生産利用」 梅澤 俊明 (京都大学生存圏研究所 教授)</p> <p>東南アジア諸国の熱帯天然林伐採跡地に広く存在する荒廃草原の植生回復と有効利用は、人類の持続的生存にむけた喫緊の課題である。この荒廃草原の環境回復とバイオマス生産農地への転換、及び得られたバイオマスをエネルギーおよび新規材料として利用するための基盤技術の開発に関する国際共同研究を進めている。この研究開発一環として、代謝工学技術を用いたバイオマス生産に適する高発熱型イネ科バイオマス植物の開発に関する研究並びに熱帯荒廃草原の現状について紹介する。</p>
	<p>16:40~17:20 講演 2 「樹木の物質生産—一枚の葉から群落まで」 舘野 正樹 (東京大学大学院理学系研究科附属植物園 (日光) 准教授)</p> <p>草本に比べ、木本の光合成能力は低い。その理由の一つは根の違いである。太い木本の根は、長寿である反面、窒素の吸収能力が低い。そのため、葉のルビスコ量を上げることができない。そうした能力の低い葉でどこまで純生産量を上げることができるのだろうか。直達光と散乱光の詳細な測定をもとに、群落の中で個葉が実際に受ける光を計算によって求め、純生産量を上げるための群落構造を推定した結果を紹介する。</p>
	<p>17:20~18:00 講演 3 「日本製紙の植物バイオ技術の取り組み」 河岡 明義 (日本製紙(株) アグリ・バイオ研究所 所長)</p> <p>日本製紙では、現在のコア事業である紙・パルプの原料以外に、エネルギー用途、バイオケミカルなどの原料への利用も視野に入れ、植林事業を推進している。当研究所では、植林事業に対して苗の増殖技術、DNA マーカーを用いた選抜育種、土壌評価技術やバイオマス量計測技術を開発している。本発表では、これらの技術開発について紹介する。</p>
	<p>※講演終了後、懇親会 (会場:2 階 223 号室) を開催しますので引き続きご参加ください。懇親会費 1,000 円を当日受付にて承ります。</p>

会場案内



理学部 2号館 (4階講堂)

第 11 回バイオマスリファイナリー研究会 参加申込方法

- ・ 団体名
- ・ 氏名
- ・ 所属
- ・ 役職
- ・ E-mail
- ・ 懇親会ご出欠

をお書き添えの上、メールまたは Fax にて事務局宛にお送りください。

申 込 先 : NC-CARP 産学連携コンソーシアム事務局 宛

E-mail : takama.junko@mail.u-tokyo.ac.jp (または Fax : 03-5841-8774)

申込締切 : 平成 28 年 1 月 15 日 (金)

※標的型攻撃メール対策のため、メールに MS Word ファイル添付されると削除されますのでご注意ください。